

中国における金銀字経の起源 およびその展開

劉 海 宇[※]

はじめに

金銀字経とは、金粉や銀粉をにかわなどに溶いた金泥や銀泥で書写した仏教経典のことである。金銀字経は、一般的に金泥で書かれた金字経と銀泥で書かれた銀字経と金泥・銀泥を用いて一行毎に交互に書写された金銀字交書経と銀字経に仏号のみを金字で書写する金銀字混書経とに分類される。本稿では、これらの金字経・銀字経・金銀字交書経・金銀字混書経の種類のことを総じて金銀字経と呼ぶことにする。東アジアにおける金銀字写経の儀礼や技術は中国大陸で発祥し、その後朝鮮半島や日本へ伝わったと考えられている¹⁾。

日本において、現存する金銀字経は奈良時代から各時代に見られ、なかんずく平安時代後期のものももっとも多い。その代表的な事例は、奈良国立博物館等に所蔵される奈良期に聖武天皇の勅命で国分寺に安置された金字金光明最勝王経や平安後期に奥州藤原氏初代清衡の発願によって金字と銀字を以て一行毎に交互に書写されて中尊寺に奉納された金銀字交書一切経などである。朝鮮半島の事例としては、京都国立博物館に所蔵される金字『大宝積経』や韓国国立中央博物館に所蔵される、開城南溪院址から出土した紺紙銀泥『妙法蓮華経』²⁾ などがある。日本では金銀字経に関連する研究は蓄積されており、美術史・書道史・仏教史等の研究分野を中心に、現存の事例や文献に記録された事例などが解明されつつある。しかし、日本および朝鮮半島の金銀字経の規範とした中国大陸の金銀字経に関する研究はいまだ少ない³⁾。中国蘇州市瑞光寺仏塔から発見された晩唐期の制作と推定される金字法華経のように⁴⁾、唐代において金銀字経の事例は存在している。中国では、金銀字経の濫觴と展開はどうなるのだろうか。

そこで本稿では、金銀字経の出現する前に流行した朱書文字に触れながら、伝世文献から魏晋南北朝期の金銀字経の事例を分析して中国大陸における金銀字経の起源を探るうえで、さらに唐代に広がる金銀字経の作例を収集し分析して金銀字経の展開する様相を明らかにし、また金銀字経の政治的、歴史的意義についても考察を加えたい。

※岩手大学平泉文化研究センター

- 1) 須藤弘敏『法華経写経とその荘嚴』、中央公論美術出版、平成二十七年版、8 - 10 頁。
- 2) 国立中央博物館編著『佛舍利荘嚴』、翰進印刷、1991 年版、82、121 頁。
- 3) 中国古代の金銀泥絵については、米沢嘉圃「中国の金銀泥画」(『米沢嘉圃美術史論集』、国華社、平成六年版、168

- 192 頁) や前掲須藤弘敏『法華経写経とその荘嚴』等を参照。中国古代の金字経に関する専論としては、管見の限り、村田みお「金字経の思想的系譜—中国六朝期から日本平安期まで」(『東方学報』第 88 冊、151-187、2013) のみ。

- 4) 蘇州市文管会・蘇州博物館「蘇州市瑞光寺塔発現一批五代、北宋文物」、『文物』1979 年 11 期、21-31 頁。

一 漢代及びそれ以前の朱書文字

中国では先秦期から漢代まで神秘性のある重要な文書を朱で書写することが多く、わけて神に告げる祝詞や神から与えられた神意のことばなどを朱書する。たとえば、商代に神意を問うための卜占の内容を記録する卜辞には朱を塗ったものがあり、また毛筆で朱書するものや先に朱で書いて後に刻したものなども見える⁵⁾。前漢期に成立とされる『大戴礼記』武王踐祚篇に、西周武王が即位したのち、古の賢王の政治について太公望呂尚に尋ねたら、太公望が「丹書に在り」と答えたことが記述されている⁶⁾。同じような内容は、戦国晩期（BC300年頃）とみられる出土文献である『上海博物館蔵戦国楚簡（七）』武王踐祚篇にも見えており、その第一簡と第二簡に「師上〔尚〕父曰：才〔在〕丹書（師尚父曰く：丹書に在り）」、第十二簡と第十三簡に「武王齋七日、太公望奉丹書以朝。（中略）丹書之言又〔有〕之（武王齋すること七日、太公望丹書を奉じて以て朝す。（中略）丹書の言にこれ有り）」、第15簡に「丹書之言又〔有〕之（丹書の言にこれ有り）」とあり⁷⁾、現行本よりかなり丹書の神秘性と重要性を強調する形となっている。春秋晩期（BC5世紀頃）のものとしてされる盟の儀式の際に読まれる辞を書いた石製や玉製の盟書が山西省侯馬市の郊外で見つかっており、その大半は朱で書写されている。盟辞の最後の部分に一般的に誓約を背く場合、「吾君其明亟視之、麻〔滅〕夷非〔彼〕是〔氏〕（吾が君其れ明らかにして亟かに之を視て、彼の氏を滅夷せよ）」と誓っており⁸⁾、神格の持つ賢明なる先君に対して、背反者の一族を滅ぼすよとの意味合いであろう。

戦国晩期（BC300年前後）の作成とされる「秦駟禱病玉版」は秦国の王族が華山の神に対して病氣平癒を祈禱するためのものであり、朱書或いは先に朱書してのちに刻した2枚の玉版からなるものである。李零氏は、「玉版」は古代の山岳崇拜の早期実物であり、後世の封禪儀式及び投龍儀式を理解するには重要な価値があるとしている⁹⁾。玉版の文字が朱書されたことが注目されるべく、神に告げる祝詞の神秘性を表す古代の制度が戦国時代にも遵守されることを物語る遺物であると考えられる。

秦漢期にも神に告げる祝詞や神から与えられた神意のことばなどを朱書するという先秦期の制度が継承されている。たとえば、秦の二世元（BC209）年七月、陳勝・呉広が蜂起を起こそうとする際に、「陳勝王（陳勝王たり）」と丹書で書かれた帛を魚腹に入れたと『史記』陳涉世家に見え¹⁰⁾、神意を示す手段として丹書を用いたと見て取れる。『漢書』高帝本紀に、劉邦が漢王朝を建立した後、論功行賞して「與功臣剖符作誓、丹書鉄契（功臣と符を剖きて誓を作り、鉄契に丹書す）」とあり¹¹⁾、誓約の神聖性を強調したのであろう。前漢晩期に、王莽が漢を篡奪しようとする際に、石に「告安漢公莽為皇帝（安漢公莽を皇帝に為たらしむるを告ぐ）」という神意を書いた「丹石之符」を作成したと『漢書』王莽伝に見える。また王莽が新という王朝を興した後、王朝の成立と太平の治世であることを天神と地祇に報告してその佑助を願う目的とする泰山封禪を行おうとした。封禪する際に神への辞を書いた玉冊が2001年に漢の長安城桂宮四号宮殿の遺跡から検出された。その玉冊に「封禪（禪）泰山、新

5) 李宗焜著、高田真菊訳『甲骨学史の奇跡—殷墟 YH127 坑の発掘と出土甲骨—』、芸文書院、2008年版、46—76頁。

6) 王聘珍撰『大戴礼記解詁』、中華書局、1983年版、103頁。

7) 馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚簡（七）』、上海古籍出版社、2008年版、151—165頁。引用文中の〔 〕は仮借字・異体字の読み替えを、()は読み下し文を示す。

8) 山西省文物工作委員會『侯馬盟書』、文物出版社、1976年、11—51頁。

9) 李零『秦駟禱病玉版的研究』、『国学研究』第六卷、北京大学出版社、1999年版、525—547頁。

10) 司馬遷撰『史記』、中華書局、1959年版、1950頁。

11) 班固撰『漢書』、中華書局、1962年版、81頁。

室昌(泰山に封禪すれば、新室昌んならん)」などの内容が刻された後、朱塗りが施された¹²⁾。『後漢書』祭祀志によれば、後漢の創立者である光武帝が泰山で封禪の儀を行う際、一時玉冊を刻することができる工匠が見つからないため、「欲用丹漆書之(丹漆を用いて之に書せんと欲す)」と漆で玉冊に朱書しようとしたという¹³⁾。

また、後漢期に大流行した石碑も先に書丹して後から刻することになり、これは石碑に書かれる文章が神意を示すものであるという讖緯思想によるものと考えられる¹⁴⁾。さらに素焼きの陶瓶に死者への除罪と子孫への祈福を目的として一般的に「急急如律令」で締めくくる「鎮墓文」が朱書で書かれている。このような朱書陶瓶はすでに30点以上確認され、桓帝・靈帝期(二世紀後半)のものももっとも多い。朱書される理由はその内容の神聖化を示したものであると考えられている¹⁵⁾。

朱の原料は天然の鉱物であり、朱砂や丹砂とも呼ばれる。その成分は硫化第二水銀 HgS で、殺菌力があるようである。また朱砂は赤色で血の色で、太陽や火炎の色でもあり、古来から魔除けや神秘性を有する色として珍重され、中国では新石器時代から戦国期まで貴族の墓葬の館内に充填されることも多く見える¹⁶⁾。古代から朱砂は高価のもので、稀有の資源でもあるため、西周期の金文にしばしば王から臣下に賜与されることがある。例えば、西周早期の「庚嬴卣(集成5426)」に「王蔑庚嬴歴、賜貝十朋、又丹一柝(王、庚嬴の歴を蔑り、貝十朋、また丹一罐を賜ふ)」とあり¹⁷⁾、新出した西周中期の『霸伯簋』の賜与品に「丹二量」がある¹⁸⁾。秦代になると、丹砂の採鉱で巨万の富を築いた寡婦清も現れた¹⁹⁾。文字を朱書することは文章の内容を神秘化するとともにその権威性をも付与することになると思われる。

二 魏晉南北朝期における濫觴期の金銀字経

後漢魏晉期以来、道教の長生術のひとつである煉丹術の隆盛により、黄金を水銀などで液体に溶かして仙薬としての「金液」をつくる技術が生まれて、その「金液」を服用することで不老長寿できるとされている。たとえば、東晉葛洪(AD283?~343)の『抱朴子』金丹篇に「金液太乙所服而仙者也(金液は太乙の服して仙になる所のものなり)」とある²⁰⁾。また、同じ葛洪の撰と伝えられる『神仙伝』に「金液之薬為上也(金液の薬は上と為すなり)」とある²¹⁾。文字通り、不老不死の仙薬とされる「金丹」は黄金と水銀を主成分とする丹砂から製造されるもので、その中に丹砂が黄金を溶かすために欠かせない媒介物であるが、その色が黄金の色であろう。同じ『抱朴子』金丹篇に金丹で書写することも記されている。

第四之丹名曰還丹。(中略)以此丹書凡人目上、百鬼走避。(第四の丹は名づけて還丹と曰ふ。(中略)此の丹を以て凡人の目の上に書すれば、百鬼走り避く)

第八之丹名伏丹。(中略)以丹書門戸上、萬邪衆精不敢前、又辟盜賊虎狼也。(第八の丹は伏丹と名づく。(中略)丹を以て門戸の上に書すれば、萬邪衆精敢て前まず、また盜賊虎狼を辟くるなり)。

初唐期の『黄帝九鼎神丹經訣』の巻一にも後漢晩期の成立とされる『黄帝九鼎神丹經』を引いて同

12) 中日連合考古隊「漢長安城桂宮四号建築遺址発掘簡報」、『考古』2002年1期、3-15頁。

13) 范曄撰『後漢書』、中華書局、1965年版、3165頁。

14) 拙著「漢碑の形制與讖緯思想」、『齐鲁学刊』2011年2期、35-41頁。

15) 西林昭一著『書の文化史(上)』、二玄社、1991年版、215-216頁。

16) 方輝「論史前及夏時期的朱砂葬」、『文史哲』2015年2期、56-72頁。

17) 中国社会科学院考古研究所編『殷周金文集成(修訂本)』、中華書局、2007年版、3403頁。

18) 謝堯亭等「山西翼城大河口西周墓地」、国家文物局主編『2008中国重要考古発現』、文物出版社2008年版、54-57頁。

19) 前掲書『史記』貨殖列伝に「而巴寡婦清其先得丹穴而擅其利數世」とある。

20) 王明著『抱朴子内篇校釈』、中華書局、1985年版、82頁。

21) 胡守為校釈『神仙伝校釈』、中華書局、2001年版、34頁。

じような記述が見える²²⁾。これらの魔除けできるとされる神秘的な文字は金丹で書写され、金色の可能性が高いだろう。また、魏晋期の成立とされる『漢武帝内伝』に「金書秘字」という言葉があり²³⁾、神秘的な呪文が金字で書写されることが記されている。

魏晋期に成熟した金や銀を液体化する技術は大規模に金泥や銀泥で書写することが出現するための必要な条件をもたらしたと思われる。この時期に仏教は中国の民衆に受け入れられるため、中国在来の神仙思想との融合を図りながら進めてきたとされている。『後漢書』に「老子入夷狄為浮屠（老子は夷狄に入りて浮屠と為す）」とあるように、後漢魏晋期の仏教は「仙仏模式」の発展様式をたどったと考えられている²⁴⁾。伝世文献資料によれば、五胡十六国期（五世紀初頭）にようやく金泥で仏教の経典を書写する行為が現れてきたという。

唐の僧祥の撰した『法華伝記』は『逍遥園記』を引用し、訳聖と称される有名な鳩摩羅什は後秦の弘始八（406）年に首都長安で金字経を作成したと記している。

逍遥園記云、外國法師鳩摩羅什、弘始七年冬、譯新法華竟、一部七卷二十八品。明年春正月本齊校定、造金字經、七寶以為莊嚴、光色映園。道俗如市、瞻仰禮拜。（中略）王謂什云、朕如法供養經卷。（『逍遥園記』に云く、外國法師鳩摩羅什は、弘始七（405）年の冬、新法華を訳し竟り、一部七卷二十八品なり。明年春正月の本齊に校定し、金字経を造り、七宝以て莊嚴を為し、光色園に映ず。道俗市の如く、瞻仰禮拜す。（中略）王、什に謂ひて云く、朕、法の如く經卷を供養す²⁵⁾。

この文章では、鳩摩羅什が作成した金字経は後秦の皇帝の勅命で書写したものであり、皇帝本人より供養されることが注目される。また同じ『法華伝記』に、南朝齊の太祖蕭道成（在位479-482）は自ら金字法華経を書写したと記されている。

齊太祖高帝道成、姓蕭、偏崇重佛、故造陟岵、止觀二寺。四月八日、常鑄金像。七月十五日、普寺造盆供、僧三百。自以香汁和墨、手寫法華經八部、金字法華二部。皆五香厨四寶遂盛。靜夜良辰清齋行道、每放金色光、照耀殿内（齊の太祖高帝道成、姓は蕭、偏に佛を崇重し、故に陟岵、止觀の二寺を造る。四月八日、常に金像を鑄る。七月十五日、普寺に盆供を造り、僧三百なり。自ら香汁を以て墨に和し、手づから法華經八部、金字法華二部を写す。皆な五香厨四寶遂〔函〕もて盛る。靜夜良辰、清齋行道のとき、毎に金色の光を放ち、殿内を照耀す²⁶⁾。

この記載によれば、金字法華経は南朝齊の太祖蕭道成本人が自筆で書写し、法会の際に行道して供養したものであるという。上記の金字経二例はともに当時の皇家の特権的な行為であることが注目される。

次に六世紀初頭の北魏晩期に金字経が作成されたことが文献に見出される。初唐の法琳が撰した『辯正論』に、

魏安豐王延明、中山王熙並以宗室博古學文、俱立道場齋講相續。以香汁和墨、寫華嚴經一百部、素書金字華嚴經一部。皆五香厨四寶函盛。靜夜良辰清齋行道、每放五色神光、照耀臺宇（魏の安豐王の延明、中山王の熙は並びに宗室を以て博古学文し、俱に道場を立てて齋講相續く。香汁を以て墨に和し、華嚴經一百部、素書金字華嚴經一部を写す。皆な五香厨、四寶函もて盛る。靜夜良辰、清齋行道のとき、毎に五色の神光を放ち、台宇を照耀す²⁷⁾。

とあり、北魏時代に安豐王の元延明と中山王の元熙が金字華嚴経を書写し供養したとされている。元熙の墓誌銘によれば、元熙は延昌年間（AD512-515）に中山王に封ぜられ、正光元（520）年に皇

22) 韓吉紹校訳『黄帝九鼎神丹経訣校訳』、中華書局、2015年版。

1999年第1期、159-170頁。

23) 王根林校点『漢武帝内伝』、『漢魏六朝筆記小説大観』、上海古籍出版社、1999年版、153頁。

25) 僧祥撰『法華伝記』卷十、『大正大藏経』51巻、94頁。

26) 僧祥撰『法華伝記』卷八、『大正大藏経』51巻、87頁。

24) 温玉成「公元1至3世紀中国的仙佛模式」、『敦煌研究』

27) 法琳撰『辯正論』、『大正大藏経』52巻、514頁。

族の内紛で失敗して殺されたという²⁸⁾。そうすると、元延明と元熙が金字華嚴經を書写した事跡はAD512年から520年までの出来事になると思われる。

北魏晩期に作成された金字經は仏典のみならず、儒教の『孝經』も金字で書写されたことが北齊期に成立した『魏書』河間王琛伝に「琛以肅宗始学、献金字孝經（琛は肅宗の学を始むるを以て、金字孝經を献ず）」と記述されている²⁹⁾。肅宗とは延昌四（515）年に六歳で即位した孝明帝のことで、その始学の際に河間王の元琛によって金字孝經が献上されたという。河間王の金字經典の献上は、おそらく前漢の河間献王劉徳が武帝に儒教の古文經典を献上したことに倣った行為であろう。前漢董仲舒の『春秋繁露』五行対篇に河間献王が董仲舒と『孝經』に関する対話が見え³⁰⁾、河間献王が『孝經』との深いかかわりが分かる。北魏河間王の元琛が金字『孝經』を献上することは幼くして即位した孝明帝の正統性を主張する意味合いが含まれると思われる。

また六世紀半ばごろ、南朝梁の武帝蕭衍（在位502-549）はその晩年に仏教に帰依して同泰寺に数回も捨身したことでよく知られている。蕭衍は皇帝の身分に相応して法会や講經のために金字經を製作したとされている。

『梁書』武帝紀に大中通五（533）年の「二月癸未、行幸同泰寺、設四部大会、高祖升法座、發金字摩訶波若經題、訖于己丑（二月癸未、同泰寺に行幸し、四部大会を設け、高祖は法座に升り、金字摩訶波若經の題を發し、己丑に訖る）」とあり、武帝蕭衍は自ら講經をして金字で書写された摩訶波若經を使ったことがわかる。同武帝紀に中大同元（546）年三月の「庚戌、法駕出同泰寺大會、停寺省講金字三慧經（庚戌、法駕は同泰寺に出でて大會し、寺省に停りて金字三慧經を講ず）」とあり³¹⁾、武帝本人は同泰寺で金字三慧經を講ずることが見える。上記の摩訶波若經と三慧經は同じ經典の別名であり、鳩摩羅什によって漢訳された『摩訶般若波羅蜜經』のこととされている³²⁾。

また、南朝梁の沈約（441-513）の「游金華山詩」に「若蒙羽駕迎、得奉金書召（若し羽駕に迎ふるを蒙れば、金書の召を奉ずるを得）」とあり³³⁾、神仙世界へ召される言葉が金字で書かれるとされる。これは前述した神秘性のある文字を金泥で書くという魏晋期の神仙思想を継承したものであろう。

以上のように、現存資料では金泥で書写するのは魏晋期（三世紀後半から四世紀前半）が最初であり、仏典金字經の事例は、五世紀初頭に鳩摩羅什によって始めたのち、南朝と北朝まで広がっている。仏典の伝播は当時の中国大陸の政治的情勢と密接な関係を持つと思われる。鳩摩羅什が後秦の弘始十一（409）年に入滅して数年後の弘始十八（416）年に、長安を都とした後秦は東晋の劉裕によって余儀なく滅ぼされた。また、まもなくして大夏国の赫連勃勃が東晋軍を長安から追い出して長安を占領したが、しかし十数年後の始光三（426）年に北魏は長安を占領して北方の統一に力を入れた。このような戦乱の世に鳩摩羅什の弟子たちは全国各地に散らばり、新訳された仏教經典もそれに伴って南北に伝わっていたと考えられている³⁴⁾。当然、鳩摩羅什の金字經の作法も南北に伝わったのであろう。仏教を布教するため、僧侶たちは早くから朝廷の庇護を獲得することに努めた。南朝梁の僧慧皎が撰した『高僧伝』に、東晋の名僧道安が「不依国主則法事難立（国主に依らざれば則ち法事立て難し）」と主張することが記されている。道安の思想よりも一層進展して、北魏初期（五世紀初頭）の沙門法果が太祖皇帝に皇帝「即是当今如来」と露骨に朝廷の庇護を希求することになる。

28) 王則・張淑華「釈北魏中山王元熙墓誌」、『古籍整理研究学刊』1999年6期、22-24頁。

29) 魏収撰『魏書』、中華書局、1974年版、529頁。

30) 蘇輿撰『春秋繁露義證』、中華書局、1992年版、314-317頁。

31) 姚思廉撰『梁書』、中華書局、1973年版、77-90頁。

32) 春日礼智「梁の武帝と三慧經」、『印度学仏教学研究』21(1)、1972年、330-334頁。

33) 歐陽詢撰『芸文類聚』卷七、中華書局、1965年版、124頁。

34) 湯用彤撰『漢魏兩晋南北朝仏教史』、上海書店出版、1991年版、339-340頁。

『魏書』 釈老志に次ぎのような記述が見える。

初、皇始中、趙郡有沙門法果、誠行精至、開演法籍。太祖聞其名、詔以禮徵赴京師。(中略) 初、法果每言、太祖明叡好道、即是當今如來、沙門宜應盡禮、遂常致拜。謂人曰：「能鴻道者人主也、我非拜天子、乃是禮佛耳(初め、皇始中、趙郡に沙門法果有りて、誠行精至にして、法籍を開演す。太祖其の名を聞き、詔して禮を以て徵して京師赴かしむ。(中略) 初め、法果毎に、太祖明叡にして道を好み、即ち是れ當今の如來にして、沙門宜しく応に禮を尽くすべしと言ひ、遂に常に拜を致す。人に謂ひて曰く：「能く道を鴻むる者は人主なり、我天子に拜するに非ず、乃ち是れ佛に礼するのみ」と)。

皇帝が写経や講経する際、天子の權威を誇示するため、金字で荘嚴された写経という様式を用いたと考えられる。言い換えれば、六世紀前葉までの金字経事例はともに皇權の象徴として金字で裝飾されることになる。しかし、六世紀中ごろに高僧の発願によって作成された金字経の事例も存在しており、それはひとつの例外といえよう。南嶽の慧思禪師は、「南嶽思大 禪師立誓願文」で42歳(553年)のときに金字摩訶波若經を作ることを発願し、ようやく二年後に「方得就手報先心願、奉造金字摩訶般若波羅蜜經一部、并造瑠璃寶函盛之(方に手に就くを得て先の心願に報じ、奉じて金字摩訶般若波羅蜜經一部を造り、並びに瑠璃の寶函を造りてこれを盛る)」という宿願を実現させた³⁵⁾。この慧思禪師は天台宗開祖智顛の師であり、上記の金字般若波羅蜜經のほか、また金字法華經をも作り、智顛をして金字経を代講せしめた、と『統高僧伝』に記されている³⁶⁾。周知のように、智顛はのちに天台宗を開き、隋の晋王(後の煬帝)の歸依を得たのである。後世に大流行した金字法華經はおそらく天台大師智顛の金字法華經を講ずることと関係が深いのではなかろうか。

三 唐代における発展期の金銀字経

前述したように金字で皇權を荘嚴する事例は早くも南北朝に見え、皇帝ゆかりの仏典のみならず、儒家の經典でも金字で書かれていたことがある。唐代にはこの伝統を継承して、金字は皇權を荘嚴する形式として位置づけされており、まず国家の行事の封禪の式典に金字玉冊という制度があり、また皇帝の詔書も金字で書かれ、さらに填金字官という官營機構まで現れてきた。その背景の中、金泥や銀泥で書写された仏典もよりいっそう発展期を迎えたのである。

1. 皇權の象徴としての金字

唐宋期になると、太平の治世であることを天神と地祇に報告してその佑助を祈願する泰山封禪の丹書玉冊は金字玉冊という制度にとって代わる。北宋初期に成立した『冊府元龜』の記載には、唐の太宗李世民は貞觀二十(646)年の詔命において歴代の賢王が封禪を行う際、「莫不揚輝於鏤玉、絢景於塗金(輝きを鏤玉に揚げて景を塗金に絢かにせざるなし)」³⁷⁾と玉冊に金塗りの文字を施すことを示している。『旧唐書』 礼儀志によれば、玄宗皇帝は開元十三(725)年に泰山の山頂で昊天上帝を祀り、その玉冊に「填金為字(金を填めて字と為す)」と太宗皇帝詔命の制度を継承することがわかる³⁸⁾。玄宗皇帝が泰山山頂で天帝を祀る玉冊はいまだ見つからないが、さいわい玄宗皇帝が泰山麓の社首山で地祇を祀る玉冊は1928年に泰安市の蒿里山で偶然出土して1971年になってついに公開した。玉冊は十五簡からなり、隸書で書写されたのち、文字に金塗りが施されたのである³⁹⁾。

唐代では道教の道士が滅罪・息災・除病・求福などをするために投龍儀式を行うが、皇帝の勅命で

35) 慧思「南嶽思大禪師立誓願文」、『大正大藏經』50巻、787頁。

38) 劉昫等撰『旧唐書』、中華書局、1975年版、899頁。

36) 道宣撰『統高僧伝』、『大正大藏經』50巻、563頁。

39) 那志良「唐玄宗及宋真宗禪地祇玉冊」、『故宮季刊』第6巻第2期、1971年、13 - 27頁。

37) 王欽若等編『冊府元龜』、中華書局、1960年版、390頁。

挙行する際、金のプレートである金簡に神に告げる辞を刻するのは一般的である⁴⁰⁾。たとえば、則天武后が久視元（700）年七月七日に嵩山で投じた金簡は嵩山の山頂で珍しく発見され、その文章に

「大周圜主武墨、好樂真道、長生神仙、謹詣中岳嵩高山門、投金簡一通、乞三官九府除武墨罪名（後略）」（大周の圜主の武墨は好みて真道・長生・神仙を楽しみ、謹みて中岳嵩高の山門に詣り、金簡一通を投じ、三官九府に武墨の罪名を除するを乞ふ）

とあり、周の国主の武墨は神仙に崇敬の意を持ち、嵩山の山門に金簡を仙界の三官九府にささげて減罪を祈願する内容である⁴¹⁾。

また、盛唐期から玉冊官・填金字官という官職が設けられ、皇帝の即位・上尊号・葬礼の際の金字玉冊の作成を担当したのである。たとえば、玄宗皇帝が開元十四（726）年に泰山で封禪の儀を行い、宸筆で揮毫して泰山の大観峰に填金字で作成した「紀泰山銘」は現在に至っても燦爛たる姿で人々の目を引く。その銘文の末尾に「登山口玉冊官□□」とある。元和十四（819）年、憲宗の「上尊号赦文」に「鑄造玉冊並填金字造宝官等各賜物五十段」と填金字官などに賜与することがあり、同じような賜与が宝曆元（825）年、会昌二（842）年、大中二（848）年、大中十三（859）年にも史書に見出される⁴²⁾。

皇帝の詔命も金字で荘嚴される場合がある。白居易「妻初授邑号告身」詩に「弘農旧県授新封、鈿軸金泥誥一通（「弘農の旧県を新封に授け、鈿軸金泥の誥は一通なり）」と詠まれており⁴³⁾、長慶元（821）年朝廷から白居易の夫人に弘農県君の邑号を策命した誥命が金泥で書かれて軸の端に螺鈿細工で装飾されていることがわかる。そのほかに薛逢「宣政殿前陪位観冊順宗憲宗皇帝尊号」詩にも「金泥照耀伝中旨、玉節従容引上台（金泥は照耀して中旨を伝ひ、玉節は従容として台に引き上す）」とあり⁴⁴⁾、皇帝の詔命が金泥で荘嚴されて金色に輝いていると記されている。

2. 唐代の金銀字経

伝世文献では唐代に金銀字経を作成する事例は珍しくないが、しかし中国大陸に現存する金銀字経は確かに唐代に溯れるものが1点しか存在しない。ここでは伝世文献を中心に、現存する晩唐期の金字経に触れながら唐代の金銀字経の作例を考察しよう。

1) 窺基の金字般若経

北宋の初期に成立した『宋高僧伝』唐京兆大慈恩寺窺基伝に、玄奘法師の弟子である窺基（632-682）が五台山に文殊菩薩像を作ったり、金字般若経を書写したりすることが記されている。

復於五臺造玉石文殊菩薩像，寫金字般若經畢，亦發神光焉（また五臺に於いて玉石の文殊菩薩像を造り、金字般若経を写し畢わりて、亦た神光を發す）⁴⁵⁾。

2) 玄覽の金字涅槃経

『宋高僧伝』唐杭州華嚴寺玄覽伝によれば、杭州華嚴寺の僧玄覽（650-734）は金字涅槃経を書写したという。

（玄覽）鑄金銅像三百五十座、弥陀為首。写経二千餘軸、金字涅槃経為首。如是功德，以順現報（金銅像三百五十座を鑄し、弥陀は首と為す。経二千餘軸を写し、金字涅槃経は首と為す。是の如き功德、以て現報に順ふ）⁴⁶⁾。

3) 楚金の金字法華経

40) 張沢洪「唐代道教的投籠儀式」、『陝西師範大学学报（哲学社会科学版）』2007年1期、27 - 32頁。

41) 董理「關於武則天金簡の幾個問題」、『華夏考古』2001年2期、79 - 85頁。

42) 任江「略論唐宋玉冊官制度」、『四川文物』2007年6期、45 - 58頁。

43) 謝思煒撰『白居易詩集校注』、中華書局、2006年版、1532 - 1533頁。

44) 彭定求撰『全唐詩』、中華書局、1960年版、6330頁。

45) 贊寧『宋高僧伝』、中華書局、1987年版、66頁。

46) 前掲書『宋高僧伝』、660 - 661頁。

南宋期に成立した『佛祖統紀』によれば、法師楚金（698-759）は玄宗皇帝の支持を得て多宝塔を作り、それを鎮護するための金字法華經を三十六部書写したという。

（楚金）血書法華菩薩戒經。以祝九重。寫法華千部。金字三十六部。用鎮寶塔。復寫千部散施信人（法華菩薩戒經を血書し、以て九重を祝す。法華千部、金字三十六部を写す。用て宝塔を鎮す。また千部を写して信人に散施す）⁴⁷⁾。

上述するように、唐代における金銀字經の事例を記録する中国側の文献はともに北宋や南宋期に成立した後世の文献である。その信憑性に疑いがあるかもしれない。しかし、幸いにも鑑真和上の伝記や遣唐使とともに唐に來た日本の留学僧たちが残した日記や上奏文などの日本の史料に唐の金銀字經のことが記されている。これらの信憑性が高い同時代の資料によって唐代に金銀字經の隆盛の一端を知ることができる。

4) 鑑真和尚が唐から日本へ將來した金字經

宝龜十（779）年に成立した『唐大和上東征伝』によれば、鑑真和尚は天宝十二（753）年、「金字『大品經』一部、金字『大集經』一部」などの金字經卷を日本へ將來したという⁴⁸⁾。

5) 最澄が唐から日本へ將來した金字經

伝教大師最澄が唐から金字經数種を日本へ將來したことがその進官録上表である『伝教大師将来目録』に記録されている。

且見進經一十卷。名曰：金字妙法蓮華經七卷。金字金剛般若經一卷。金字菩薩戒經一卷。金字觀量壽經一卷⁴⁹⁾。

6) 円仁が見た金銀字大藏經

『入唐求法巡礼行記』によれば、円仁は開成五（840）年七月二日に五台山保応鎮国金閣寺の藏經閣において紺碧紙金銀字大藏經6千卷を披見したという。

瞻禮已畢，下閣到普賢道場，見經藏閣。大藏經六千餘卷，總是紺碧紙、金銀字、白檀玉牙之軸。看願主題云：鄭道覺，長安人也。大曆十四（779）年五月十四日巡五臺，親見大聖壹萬菩薩及金色世界，遂發心寫金銀大藏經六千卷，云云（瞻礼すすでにおわり、閣を下りて普賢道場に到り、經藏閣を見る。大藏經六千余卷あり、すべてこれ紺碧紙、金銀字、白檀と玉牙の軸なり。願主題をみるにいう「鄭道覺は長安人なり。大曆十四（779）年五月十四日、五臺をめぐり、親しく大聖と一萬菩薩及び金色世界とを見て、遂に発心して金銀大藏經六千卷を写す云云」と）⁵⁰⁾。

ここに注目されたいのは、この鄭道覺の発願によって五台山の金閣寺に奉納された金銀字大藏經が「總是（すべてこれ）紺碧紙金銀字」であると、『巡礼行記』に強調されていることである。小野勝年氏は、これが金銀泥で交書した事例とし、天平十（738）年の「經卷納櫃帳」に記された「金銀交字神符經」が知られるように日本にもその形式が伝わったとしている。「總是（すべてこれ）紺碧紙金銀字」の字面から考えると、これはもっともな説であり、首肯すべき意見であろう。金閣寺は不空三蔵が代宗の勅命によって建造した護国道場であり、大曆五（770）年に竣工したものである⁵¹⁾。その中の金銀字一切經は鄭道覺個人の発願で書写されたものであっても護国的な色彩があり、金閣寺にふさわしいものだと思われる。

上記のように、中国と日本の文献にはそれぞれ唐代の金銀字經の事例が多く見出されるため、唐代は金字經の發展期とも言えると思われる。また、金銀泥で制作された仏画は唐代の詩文に八世紀の盛唐

47) 釋志磬『佛祖統紀』卷第二十二、『大正大藏經』49卷、245頁。

48) 真人元開『唐大和上東征伝』、中華書局、1979年、87頁。

49) 最澄『伝教大師将来目録』、『大正大藏經』49卷、245下。

50) 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第三卷、法蔵館、1989年版、94-123頁。

51) 肖雨『金閣寺仏教簡史』、『五台山研究』1997年第3期、11-21頁。

期のものが詠まれている。唐代の金字経の現存例としては、九世紀の晩唐期の制作と推定される金字妙法蓮華経の作例が1点現存する。次のように取り上げよう。

7) 李白が見た「金銀泥画西方浄土变相」

馮翊郡出身の秦夫人が亡夫湖州刺史韋公を供養するために「金銀泥画西方浄土变相」を制作させてまた当代一流の詩人李白に讃並びに序を依頼した。そこで李白が作った「金銀泥画西方浄土变相讃並序」に「圖金創瑞，繪銀設像。八法功德，波動青蓮之池；七寶香花，光映黃金之地（金もて図きて瑞を創り、銀もて絵きて像を設く。八法の功德、波のように青蓮の池を動し、七寶の香花、光のように黄金の地に映ず）」と詠まれた⁵²⁾。この仏画の制作年代について、米沢嘉圃氏が八世紀の盛唐期と推していることが問題ないのであろう⁵³⁾。

8) 蘇州瑞光寺塔から発見された晩唐期の制作と推定される金字妙法蓮華経

1978年4月、北宋期に造営された蘇州瑞光寺塔から金字妙法蓮華経7巻が発見され、その第1巻の巻末に「常州建元寺長講法華経大徳知口記」、第2巻の巻末に「大和辛卯（931年）四月二十八日修補記」と墨書される⁵⁴⁾。これらの墨書及び料紙の性質などにより、補修を加えない巻1のみが八世紀中葉から九世紀中葉に制作されたことが明らかにされている⁵⁵⁾。

唐代には金銀字で仏典を书写することが増えて金銀字交書とされる大蔵経まで現れる中、当時の人々がこれらの金銀字経をどう受け止めたのであろうか。中唐期の詩人鮑溶の「禪定寺経院」詩に「金泥落聖言（金泥もて聖言を落す）」とあるように、当時の人々は金字で聖人の言葉を書くと理解しているようだ。当然、高宗皇帝と則天武后が朝廷内外とも「二聖」と称されるように⁵⁶⁾、皇帝や皇后も聖人のうちである。そのため、仏典も皇権の象徴としての金字の玉冊や詔命と同格に取り扱われて金字で書写することになると思われる。

四 おわりに

本稿で跡付けた中国古代における金銀字経の発生と展開を次ぎのようにまとめる。

中国古代では先秦期から漢代にかけて神に告げる祝詞や神から与えられたとされる神意のことは多く朱で書写する。朱は血の色で、また太陽や火炎の色でもある。朱書する行為は文字の内容を神秘化するとともに、文字に権威性を付与することにもなると思われる。一方、後漢魏晋期以来、道教の長生術のひとつである煉丹術の隆盛により、黄金を水銀（朱砂）などで液体に溶かして不老不死の仙薬としての「金液（金丹）」をつくる技術が成熟した。この「金丹」で書写された金色の文字は神秘性を持ち、魔除けできるとされる。後漢魏晋期における仏教は中国の民衆に受け入れられるため、「仙仏模式」の発展様式をたどるなかで道教のやり方の取り入れ、ようやく仏陀の教えである経典を金字で書写する行為が現れてきたと考えられる。

中国古代では色彩の使用が統制されてきた形跡はある。五行説では、青（木）・赤（火）・黄（土）・白（金）・玄（水）の五色はそれぞれ五方（東・南・中・西・北）を配当される。そのなか、黄色は土の色で、中央の色でもあり、もっとも貴い色とされている。これこそは金字で皇権を荘厳する思想

52) 瞿蛻園・朱金城校注『李白集校注』、上海古籍出版社、1980年版、1625 - 1626頁。

53) 米沢嘉圃「中国の金銀泥画」、『米沢嘉圃美術史論集』、国華社、平成六年版、168 - 192頁。

54) 蘇州市文管会・蘇州博物館「蘇州市瑞光寺発現一批五代、宋代文物」、『文物』1979年11期、21 - 31頁；蘇州博物館編著「蘇州博物館藏虎丘雲岩寺塔、瑞光寺塔文物」、

文物出版社、2006年、159 - 163頁。

55) 蘇州市第一輕工業局 許鳴岐「瑞光寺塔古経紙的研究」、『文物』1979年11期、34 - 38頁。

56) 前掲書『旧唐書』高宗本紀、100頁。「自誅上官儀後、上每視朝、天后垂簾於御座後、政事大小皆預聞之、内外稱爲『二聖』。」

的な根源であると思われる。上述したように、その事例は早くも南北朝に見え、皇帝ゆかりの仏典のみならず、儒家の経典でも金字で書かれていたことがある。唐代では、金字は皇権を荘厳する形式として位置づけされており、封禅の式典や皇帝の詔書などが金字で書かれ、填金字官という官営機構まで現れてきた。

現存資料では仏典金字経の事例は、五世紀初頭に鳩摩羅什によって始められた。南北朝期の金字経事例は、ほぼすべてが皇帝の権威を誇示する目的で写経を金字で荘厳する。唐代になると、当時の人々は「金泥落聖言（金泥もて聖言を落す）」というように、金字で仏陀（聖人）の言葉を書くことと理解し、仏典も皇権の象徴としての金字の玉冊や詔命と同格に取り扱われて一般の僧侶や貴族でも仏典を金字で書写することができたと思われる。これこそ金字経が唐代において発展期を迎えた理由ではあるまいか。

付記:本稿は、岩手大学平泉文化研究センターが主催した「2015UURR 国際シンポジウム（2015年8月26日、浙江省文物考古研究所）」において口頭発表した内容の一部です。なお、本稿をまとめるにあたり、岩手大学平泉文化研究センターの客員教授菅野成寛氏に多くの有益なご指導を賜りました。ここに感謝申し上げます。